

巻 頭 言

フィールドワークとアクティブ・ラーニング

本年4月、近代文化研究所所長を拝命したが、実は私の専門は動物生態学で、現在熱帯林と都市という2つの対照的な環境で昆虫の生態と行動を調べている。もっぱら屋外で甲虫やチョウなどの行動を観察してデータを取る、典型的な「フィールドワーカー」である。

学位を取得してから大学で職を得るまでの期間（いわゆるオーバードクター時代）、野外で実際にチョウ類が天敵の鳥からどの程度攻撃を受けているのかを調べるため、京都市北部の岩倉（幕末に岩倉具視が蟄居していた地域）の里山でチョウの標識調査を行っていた。午前中は大学での非常勤講師や予備校の数学講師などのアルバイトを行い、その足で午後は車を運転して調査地に向かう。車中でネクタイをはずし、積んである捕虫網やフィールドノートを取り出して、ワイシャツに普通のズボンというあまりフィールド向きでない服装でひたすらチョウを捕らえていく。チョウの翅を調べて鳥の攻撃跡（ビークマーク）があれば記録し、マーカーペンで番号を付けて放す。この仕事は約2年間続けたが、定職がない割には実に充実していて楽しく、午前中のアルバイトを含めて現在の大学教員としての仕事に大いに役立つ経験であった。

また昆虫愛好家としての「趣味の研究」では、大好きだったカミキリムシ類の幼虫期の食樹解明を行っていた。カミキリムシ類は日本だけでも800種以上が分布し、幼虫は主として様々な樹木の枯れ枝に食い入るが、当時どの種の幼虫がどんな種類の樹木に入るかがあまりよくわかっていなかった。そこで国内の色々な場所で森に分け入って、枯れ枝を切っては柴刈り爺さんよろしく持ち帰り、どのような種類の樹木の枯れ枝からどんなカミキリムシが出てくるかを調べたのである。要するに、これは珍しい昆虫を手に入れようとする際に用いる安易な方法の一つなのだが、それまで幼虫期が未知だった種の生態を解明するという点では貴重な学術情報を提供することになる。単に珍しい虫が得られたと喜ぶだけでなく、同好会誌や学術誌に情報を送り掲載してもらうことで名前を知ってもらって全国に仲間が増え、このネットワークが意外にも現在の研究生活に役立っている。こう考えると、意識はしていなかったが研究者・教育者としての私の毎日は、かなりアクティブなフィールドワークに支えられているのだなと思えてくる。

話は変わるが、最近の大学教育では、シラバスから始まって、ポートフォリオ、ルーブリック評価、ピアサポート・ラーニングといった横文字がずらりと並ぶ。良くも悪くも、アメリカ式の教育法が主流となっているようだ。少々古いタイプの教員である私はいささか戸惑いを感じるどころだが、それらの中にあってこれは当然必要と思うのが「アクティブ・ラーニング」だ。その字のごとく、学生が受け身ではなく積極的に行動して授業に参加していくというものである。私のように勝手に動いてデータを取るタイプの人間にとっては、このアクティブ・ラーニングの指導はお手の物と思われるかもしれない。実は全くの逆で、他人にあれこれ指図されることが嫌いな私は、学生を巻き込んでアクティブに動かすことも苦手なのである。だからといって何もしないわけにはいかないので、自分が好きなテーマになれば学生も少しは関心をもつだろうということ、そしてやってみればまあ何とかなるだろうとのお気楽な前提で、授業にいくつかのアクティビティを取り入れているこの頃である。

（常喜 豊）